

## 改訂第3版にあたり

本書の初版が上梓されたのは、1999年6月のことである。

本書は、数多く出版されている薬物解説書の記載にとどまらず、診療の現場において、実際に患者さんを目前にしてどのような処方方が最適なのか、指南書になることを目的に編纂された。この趣旨は多くの医師、研修医の先生方にご理解され、初版、改訂第2版ともに数多くの方々にご活用いただき、好評を博してきた。

臨床の現場で役立つという本書の趣旨は、当然ながら改訂第3版においても踏襲している。今回の改訂にあたっては、最近の医学医療の進歩に伴って新薬が開発されたり、治療法が改変されたものは特に重点的に改訂した。治療ガイドラインが提示されたものについても盛り込むことにした。逆に、すでに使用されなくなった治療薬は削除することとした。

さて、改訂第2版以降、医療の現場で大きな変化があったものの一つがジェネリック医薬品使用の積極的な推奨である。処方箋を発行する際に、ジェネリック医薬品使用の可否がチェックされるようにすらなっている。こうした変化を受け、本書では、ジェネリック医薬品を一覧にまとめ、付録として掲載することとした。紹介されて受診した患者さんがジェネリック医薬品を使用している場合の参考になるようにも配慮した。数多くあるジェネリック医薬品のすべてをカバーするわけにはいかないが、日常の診療で役立つように、できるだけ多くのジェネリック医薬品名を掲載した。

臨床の現場でご活躍されている医師、研修医の方々におかれては、本書を診療机上において日々ご利用いただきたいと願う。また、薬剤師の方々には、医師が実際に薬物療法をどのように行っているのか、ご参考にしていただきたいと思う。さらに、将来、薬物治療に参画することになる医学生、薬学生、さらにコメディカルの方々にも役立てていただければと思う。

編者の意図にご賛同されて執筆・改訂の労をとられた各執筆者の専門医、羊土社編集部に心から深謝したい。

2008年 梅の薫る候

奈良信雄

## 初版のはしがき

薬物療法は、診療科のいずれを問わず、治療の根幹をなす。

個々の患者の病態に応じて、もっとも適切な薬剤を選択し、適切な用量で適切な期間投与すれば、必ず予測どおりの効果は得られる。しかし逆に、治療薬の選択を誤ったり、投与量や投与期間が適当でなければ、予期した効果はあげられない。そればかりか、重篤な副作用が出現する危険性すらはらんでいる。

では、どのようにして個々の患者に即応した薬物療法を行えばよいのだろうか？

そもそも、薬剤について解説した書物は数多い。しかし、薬物の特性や効能、あるいは副作用については記載されているものの、実際の診療現場で指針となるような書物は、さほど多くない。すなわち、患者ごとに、どういう薬剤を使ってどういう投与法を行えばよいのか、それを懇切丁寧に解説したガイドブックはほとんど見当たらないのが現状だと思う。

ベテラン医師は、患者を目の前にして、どの薬を選択するかは、ごく自然と頭に浮かぶ。それは単なる気まぐれとか思いつきで処方しているわけではない。必ず、明確な理論的裏付けをもち、処方しているはずである。本態性高血圧症をとってみても、若年者と高齢者では、降圧薬を使い分ける。気管支喘息を合併していれば、投与する薬にもおのずと配慮が必要である。痛風に対しても、理論的根拠に基づいて尿酸産生抑制薬と排泄薬を使い分ける。これらは、ベテラン医師が学識と長年にわたって培ってきた経験に基づき、自然に湧き出てくる発想である。

これに比べて、研修医、診療経験が浅い医師、あるいは実地医家でも専門外の領域ともなれば、薬剤を理論的に選択することは決して簡単ではない。同じ疾患に認可されている薬の種類も数多く、どれから先に使っていいものか、判断しにくいのが現状ではなかろうか。仮に選択できたとしても、どのくらいの期間の投薬が最適で、減量なり中止はどう判断したらよいのか、分りにくいと思う。

そこで、各分野で活躍されているベテラン医師にお願いし、理論的に処方している薬の使い方をマニュアルとしてまとめ、研修医、あるいは実地医家の諸先生に伝授するために編集したのが本書である。対象とする疾患も、日常の診療でよく遭遇する疾患に限定し、実際に役立つものにした。

もちろん、このような書物における最大の欠点は、医師によって薬の使い分けが異なり、千差万別だとの反論であろう。確かに、ほかの処方があったり、時とともに処方に対する考え方が変化したりする。しかし、実際にベテラン医師がそれぞれの分野で普段に使っている処方を紹介すれば、日常診療にとっての指針になることはまず間違いないと思う。

本書では、疾患を概説し、その疾患に対してどのような薬物療法が実際に行われているのかを具体的に紹介することにした。投与に当たっての注意点や、投与期間、あるいは減量や中止の目安も紹介した。患者に服薬指導する要件や、ワンポイント・アドバイスも適宜盛り込んだ。持ち運びに便利な装丁にし、いつでもどこでも参照できるように工夫をした。外来診療室、あるいは病棟医師勤務室に常備されれば、必ずや診療の指針になると確信する。ぜひとも、ご活用いただきたい。

なお、本書の企画ならびに編集に当たっては、羊土社編集部の金子晴美さん、朝日恵さん、久本容子さん、一戸裕子編集長のご尽力をいただいた。編者のわがままな要求にも快く応じていただき、廉価で真に役立つ書物が上梓できた。ここに深謝したい。

1999年 初夏

奈良信雄